平成２７年度　環境科学院　修士論文内容の要旨

大雪山国立公園旭岳における自然保護活動の国際対応に関する考察と提案

北海道大学大学院　環境科学院
環境起学専攻　実践環境コース
方　翀博

国立公園を訪れる利用者の増加に伴う自然環境への影響は、数多く報告されている。例えば、栗山・庄子(2005)は、大雪山国立公園において「登山道の周辺において、利用者の踏みつけによる高山植物の破壊が生じ、さらにそれが登山道の幅員拡大や土壌侵食をもたらしている」と報告している。また小林（2012）は「環境配慮のため、利用者の適切な行動を導出するアプローチとしてガイドや情報提供を通じ、利用に対する環境への正確な知識伝授の必要性がある」と指摘している。大雪山国立公園旭岳では、NPO法人大雪山自然学校が、大雪山国立公園保護協会から「旭岳自然保護監視員」(以下、監視員とする)を業務委託され、(1)すぐれた自然環境の保全を図るため、登山道や案内看板など施設の維持管理及び軽微な補修、(2)利用者への情報提供・解説・指導・利用マナー普及などの対策業務を実施している。旭岳においても、海外からの訪問者の利用が最近増加している。彼らにとっても、自然環境保全のため、利用者の国際対応をせねばならない状況になっている。本研究は旭岳姿見エリアにおける自然環境保全を事例として、海外からの訪問者への国際対応の現状を考察し、今後の対応について試みを通しての提案を行った。

2014年6月から2015年9月まで、監視員の業務が手伝う「大雪山国立公園旭岳自然保護ボランティア活動」に計9回27日間参加し、旭岳姿見エリアにおける自然環境保全活動の現状に関する参与観察を行った。さらに、この活動の一部を改変して、2015年8月28日～30日の3日間に北海道に居る留学生3人が参加するボランティア活動を実施し、海外からの訪問者から見た旭岳姿見エリアの国際対応について、聞き取り調査を行った。また、自然保護現場のスタッフの現状(特に国際対応)に対する考えを知るために、現場関係者に半構造化聞き取り調査を行った。これらの聞き取り調査に対する裏付け資料として、監視員の2014年度と2015年度の業務日誌も調査対象とした。

調査の結果、旭岳姿見エリアに英語表記の掲示物は必要最低限あるが、中国語などが書かれた掲示物はごく少数である。しかも海外からの訪問者はその存在に気づいておらず、もしくは気づいても注目していないことが分かった。また、 姿見の駅にある注意事項や開花情報などを伝える「3分レクチャー」は日本語のみで、日本語が分かる観光客でない海外からの訪問者はその内容を知ることが出来ない。さらに、日本人向けの情報とは異なる、海外からの訪問者が必要とする情報に、監視員が気づいていないものがあることが分かった。例えば、「登山道」という表示は、中国人も読めるが、日本では登山装備をした人が登る道を指すのに対し、中国では観光地内の高低差を配慮して整備された道のことを指す。

上記の調査にもとづいて、海外からの訪問者への国際対応を提案する試みとして、既存の散策マップを元に中国語版を試作した。中国人が必要とする情報と誤解を生じない用語に配慮し、さらに分かり易いデザインにして、自然環境保全や安全利用に関する情報を掲載し、監視員等に評価してもらった。試作とその評価を通じて、今後の国際対応に関する提案を深めることができた。